くらしを豊かにする図書館づくり

【基本方針】

八女市立図書館は、明治３６年（１９０３年）に、３名の地域の篤志家により建設され、明治３８年（１９０５年）に八女郡教育会が運営する「八女郡図書館」として開館しました。このことから、市立図書館はその成り立ちから非常に市民とのつながりが強い「公共図書館」であったことが分かります。開館から約１２０年が経過した現在、今後の市立図書館の在り方を検討するにあたり、先人たちが紡いできた図書館と市民との関係性については、より大切にすべきと考えています。

市は約４８２ｋ㎡という広大な面積を有し、その約６５％を豊かな森林資源が占め、そこで生まれる清廉な水と肥沃な大地は「八女茶」などの良質な農産物を産みます。また、古くから交通の要衝として栄え仏壇やちょうちんのような伝統産業を育み、３名の文化勲章受章者と３名の直木賞作家を輩出するような文化的な雰囲気も醸成しています。このような豊かな環境のなかで、毎日繰り返されている市民のくらしに寄り添い、それをよりよく、より楽しくする役割を図書館は担いたいと考えています。たとえ小さくても図書館で生まれる発見や達成感、解決のよろこびが市民のくらしを豊かにしていくはずです。

【取組の方向】

「へぇ～、そうなんだ！」を増やそう

「人生百年時代」とよばれる長寿命社会において、市民のひとりひとりが満足感のある人生を送るためには生涯学習の充実が必要です。細分化、多様化された価値観に対応して暮らしのさまざまな分野をテーマとした多彩なプログラムを提供することで市民のくらしの質を高めます。

「どうも、ありがとう！」を増やそう

人口減少、高齢化傾向にある本市の将来の財政状況を考えると、市民も利用者としてだけでなく図書館の運営に市民も参画し“自分のまちの図書館”として関わり続ける仕組みが必要です。市民も自分の経験や特技、趣味などを図書館のプログラムに活用するなどの役割を担うことで主体的で張りのあるくらしになります。

「なんか、面白そう！」を増やそう

子どもたちを取り巻くメディアが多様化するなかで、じっくりと時間をかけて自分自身との対話を重ねながら、新たな言葉や知識、考え方と出会う読書は子どもたちの成長に不可欠なものです。読書を習慣化させ、好奇心を刺激して学びの喜びを体感させる場所をつくることで、将来の大きな夢や希望を育てます。

「いや～、助かった！」を増やそう

　就職や仕事、家事、健康、人間関係など身の回りの課題を解決するために知識や情報は大変役に立つものです。特に、人的なサービスが乏しい地方部においては図書館が提供する的確なレファレンスサービスや web サービスが大きな役割を果たします。図書館はくらしの悩みや不安、不便を解消し、夢や希望を叶えます。

「まちの記録」を増やそう

　漠然と過ぎているように感じる時間であっても、私たちが暮らす“まち”はあちこちにその記録を残しています。かつては一方通行であった情報が、双方向になり市民も情報提供者となり得る状況です。社会的な大きな出来事だけでなく、まちかどの小さな出来事や面白い人物などもまちの記録として未来に伝えます。

「はぁー、ほっとする！」を増やそう

　これまでの図書館といえば、静まり返った館内で読書好きが本とにらめっこしているイメージが強いと思います。もちろん、読書をするのに最低限の環境は必要ですが、図書館が本だけでなく顔馴染みの仲間と会えたり、家庭とは別のもうひとつの心落ち着く居場所として市民のくらしに憩いを与える存在になりたいと思います。